

ははた本

NO. 14



1983.7

神戸市立王子動物園

你好、親愛的動物家族

ご機嫌よう！ 王子の動物さん、久し振りに戻ってまいりました。美しい桜と緑の樹々に迎えられて、ホットした休らぎと、これから精一杯頑張る決意と責任の重さを痛感しております。

この7年間の時の流れは王子動物園を大きく変え驚異的な成長を遂げているのに目を見張りました。放養式動物舎をはじめ太陽の動物舎、動物病院、文献資料の収集、飼育スタッフの充実、友好都市天津市との動物交換、特筆すべきはポートピア'81でのパンダの展示飼育という貴重な体験を園をあげて成功したこと等々です。

この様に施設、技術ともに充実したものを基礎に今後如何に社会へ貢献するかという重要な使命を負っている現在、その果たす役割は重いものがあると考えております。

現在の世情は経済の高度成長期のヒズミをもちに受けて不景気時流の中で様々な改革、改善が図られております。しかし、依然として国土の開発は進行し、土地の暴騰は国民生活を圧迫し、一見平和そうな動きの中で他人の事など構っておれぬという自己本位的思潮が高まり、これが青少年非行、犯罪の増加など殺伐な世相につながっております。

今こそ人々は自然のたたずまいや動物達の偽りのない生活に目を向けて心の余裕を取り戻す時であり、動物園をはじめとする自然科学施設の存在価値はそこにあるのではないのでしょうか。

われわれと同じ時、同じ地球上でトラやライオン、キリンやシマウマ、ゴリラ、チンパンジー、その他多くの鳥や獣たちと人類は一緒に生活しているのです。何と素晴らしいことではありませんか。われわれ人類はややもすると地球の支配者や征服者であると思いがつた考えを抱く輩もおります。しかし、地球上には人類よりももっと多くの生き物が仲よく共存生活を営んでおります。ただ、多くの場合その生殺与奪の権は誤った考え方を持つ人間の手に握られております。それらが行動を開始すると地球上の楽園はたちまち破壊され滅亡してしまいます。

すでに最後の動物達の楽園であるアフリカ大陸においても開発や内戦によって直接また

は間接に動物達の生存が奪われ自然が破壊されております。近い将来にはキリンやカバの生棲地はなくなり、フラミンゴの群れ集う湖や沼は干拓されてしまいます。国内においてもカワウソ、トキ、コウノトリの絶滅も時間の問題となって来ております。自然の人為的な破壊と人間の心の荒廃に対し、われわれ自然の宝を預かる動物園マンは常々声を大にして人々の心に呼びかけなければなりません。

限られた人員、施設ではありますが、より効率に仕事を進めるためには全員の英知とチームワークが心要です。多くの樹々と緑の良い環境を持つ動物園として30数年神戸の市民に親まれて来た当園です。これからは自然界と人類の将来に目を馳せ一歩一歩前進して行きたいと念願しております。

神戸市立王子動物園

園長 福 岡 順 三

も く じ

◆你好 親愛的動物家族	2
◆ザークよ 安らかに眠れ	3
◆飼育うらばなし	
●ベニガオザルの親子結合作戦	6
●フラミンゴに待望のひな誕生	7
◆今年もベビーラッシュ	8
◆動物育児日記	
●ヒマラヤグマの子ども	10
●フクロテナガザルの人工ほ育	11
◆動物なぜなぜ問答	12
●背の高いキリンやシマウマはどのような眠り方をするのでしょうか。	
●「ワニ、何で動かへんの？」	
◆動物もの知り手帳 角のお話(その2)	13
◆トピックス	14

表紙写真

天津からの友好動物 レッサーパンダ

(撮影 福田元二)

ザークよ 安らかに眠れ

頭は仙人のごとく、体毛はロマンスグレー、顔はキリリと引き締った男前、貫録十分なその姿はだれが見ても動物園の主でした。でも、今はもうおりません。ローランドゴリラ「ザーク」は本年3月1日、独身で通した28歳の生涯を静かに閉じました。

◎生いたち

ザークは西アフリカ生まれの雄で、昭和32年に我が国では初めてのゴリラとして仲間のブルブル(雄)とムブル(雌)と一緒に東京上野動物園にやって来ました。当時まだ2歳の育ち盛りで、3頭とも仲が良く楽しい毎日を送っていました。成長するにつれて恋をする年ごろになりましたが、雌1頭に雄が2頭ではトラブルが起こるのは当然で、遂に、ブルブルとムブルが結ばれ、ザークは恋の争奪戦に敗れたのです。

のけ者にされ、すみで小さくなっている哀れなザークの姿を見るに見かねた上野動物園の人たちが、彼のために安住の地を捜され、その結果、王子動物園へ来ることが決ったのが昭和38年でザークが8歳の時でした。

◎初対面

ザークが王子動物園へ来ることが決った時、私はその飼育担当を命ぜられ、飼育実習のため上野動物園へ出向きました。初めてザークと対面した時、ザークは私のような新参者はまったく相手にせず、ソッポを向きます。私はなるべく顔を覚えて欲しいと思いいろいろと手をつくしましたが、だめ、これから先はどうなることか、と気が重くなります。幸い、上野動物園でゴリラの担当だった山崎さんに実習をしながらいろいろと教わりました。ザークが3頭のゴリラの中では最も気が小さく、神経質であり、用



ありし日のザーク

心深いことなどです。10日間の実習も終わり、私が神戸へ連れて帰る予定でしたが、ザークはそれを知ったのか、輸送オリに入りません。麻酔薬を飲ませて眠らせる方法もとられました。成功せず、延期することになり、私はひとまず神戸へ帰りました。その後、何回となく試みた後、動物舎を一部改造して、やっとの思いで輸送箱に入れ、トラックで神戸へ運び込みました。

◎さびしがり屋

輸送には山崎さんがザークに付きっきりでしたが、少しでも山崎さんの姿が見えないと大声で鳴き叫んだそうです。王子動物園に着いて早速、猛獣舎を一部改造した部屋に入れましたが、初めての場所ですので不安で落ちつきません。しかし、山崎さんが居ると安心するのか、次第に落ちつき始めました。山崎さんが東京へ帰られてからが大変でした。部屋の片すみにうずくまりえさも食べません。いろいろとなだめたり、すかしたり、好物のりんごやバナナを与えても

だめ、夕方薄暗くなると「ホーホー」と上野の森や仲間たちを思い出すように泣きます。そんなザークを一日も早くなじませようと私はザークの側で夜の一時を過したことも度々ありました。

◎「リリー」との出会い

ジョンボリとしているザークの姿を見るのがつらい毎日が続きました。何とか連れ合いを捜してやりたいのですが、当時はゴリラの雌がどこにでも居るわけがなく、しかも、ザークの年齢に合う相手を手に入れることは不可能でした。関係者が寄って考えた末、隣の空き部屋に同じ類人猿の仲間であるチンパンジーを入れて友達を作ってやろう、ということになり、早速、国内の動物園を捜し、浜松の動物園に居るリリーというチンパンジーを入れることになりました。リリーは当時8歳の雌で、芸のできるチンパンジーとして人気スターでしたが、舞台が忙しくて婚期を逸し、舞台も引退して一人わびしく暮らしていました。その素直な気性が買われて話がトントン拍子に進み、その年の11月に王子動物園にトレードされました。到着してすぐ、ザークの隣の寝室へ入れられ、鉄格子越しに見合いが始まりました。初めはお互いに気のない素振り、時々、ニラメッコする程度でしたが、半日もするとどちらともなく手を差し出すようになり、この作戦は見事成功しました。



タオルを頭にのせて

◎心の恋人

ザークの食欲はみるみる回復し、夜も泣くことなく大の字になって安眠するようになりました。1カ月後初めてこの2頭を一緒に運動場へ出すことにしました。おずおずリリーに近ずき体に触れようとするザーク、相手が大きいので思わずキャーキャーと逃げ回るリリー、関係者が心配そうに見守る中でゴリラとチンパンジーの同居が始まりましたが、心配無用、うち解けたのか、2頭でじゃれ合う仲になりました。それからは毎日この光景が見られるようになりました。時おり親愛の情を込めてリリーの肩に手をかけようとはしますが、リリーはサッと身をかわします。恨めしそうに横目でにらむザーク、といっても別にいやがる様子でもありません。追っかけっこをして遊んでいるようです。回を重ねるごとに2頭の間は狭まり、相撲をとったりお互いに背中や顔をなでるようになり、すっかり意気投合したようでした。さびしがり屋のザークにとってリリーとの出会いは測り知れない大きな心の支えになったのです。

リリーが来てからザークはずい分扱いやすくなりました。警戒心の強いザークは新しい食物にはなかなか口をつけませんが、リリーがおいしそうに食べているとそれを見て食べ出したり、みかんの皮を歯でむくことも、リリーが手ほどきをしました。12年ほど前に、新しい獣舎がで



リリーと遊ぶザーク(右)

きて、引越すことになりましたがザークはだだをこねて動かず飼育員を困らせましたが、リリーが先導役を務め、無事に引越しができ、私たちをホッとさせたこともありました。ザークとリリーは種類が違いますので結婚できません。しかし、ザークにとってリリーは心の恋人、側に居るだけで大へん心強かったことでしょう。

◎ギネスブックに登場

リリーが来てから見違えるように元気になったザークはみるみるうちに体重が増えました。10年後には200kgを越すようになり、一緒に居るリリーは押しつぶされるようになり危険を感じて逃げ回ることもありました。でも、「側にいてくれるだけで良い」というようにお互いが目で動きを追いながら心は通じているのです。

昭和45年ごろのある日、ザークは何かのはずみで右足のかかとに切り傷ができました。橋本飼育係長（現・主幹）が治療に当たりましたが、直接体に触ることができないので、注射器に薬を入れて鉄格子越しに薬を飛ばして塗る方法をとったのですが、頭の良いザークは橋本さんが注射器を構えるとグローブのような大きな手で傷口を隠し、なかなか薬が塗れません。あの手この手でなだめたり、ごまかしたりして、油断しているすきに薬を飛ばし、やっとな命を落としました。かなり痛かったのでしょう。奇声を出し怒りました。傷はすぐ治りましたが、それ以来、橋本さんの姿を見ると大声を出して怒ります。あの大きな体格から想像もつかない憶病、細心、神経質な一面をのぞかせていました。

王子動物園では毎年動物を計る会が行われます。ザークも何回かこの会で計ってもらいましたが、昭和50年には285kgで自己最高記録、この数字が数年後に「ゴリラ世界一」の項目でギネスブックに載りました。しかし、飼育している者にとっては世界一の肥満体ではあまり名誉なことではなく、それからは野菜を主にした美容食にしましたが、それでも昨年は263kgでした。

◎天国への旅立ち

王子動物園へ来て20年、時々、軽いかぜを引くぐらいで大きな病氣もせず、心の恋人リリー



キリリと引き締った美男子

と遊び、時には哲学者のように入園者を見つめてきました。しかし、近年は白毛も増え、しのびよる年波か、めっきり老け込み、かぜを引く回数も多くなりました。今年2月中ごろから食欲もなく好物の果物も口にしません。獣医さんの懸命な治療にもかかわらず、部屋の片すみでうずくまったままです。2月28日の夜、私は元気づけるため寝室へ行き、「ザーク、元気を出せ、しっかりするんや」と声をかけると、むっくり起き上り、表情に出さないが苦しみに耐えているのか、額には汗がにじんでいました。私が手を伸すと大きな体を懸命に支えながら、もたれるような格好で大きな手を差し出しました。私は迷わずザークの手をぐっと握りしめて顔を見つめました。冷い手でした。何かものを言いたそうな表情でした。ザークを飼育して20年、手を握ったのはこの時が最初であり、最後でした。翌朝、ザークは天国へ旅立ちました。いつもと変わらない幸せそうな顔をして……………。

◆ ◆ ◆
「ザーク死亡」のニュースは新聞、ラジオ、テレビで広く報道され、全国からおくやみの電報や手紙が数多く寄せられました。花を供えて下さった方もおられます。多くの方々に愛されたザークは幸せ者です。ありがとうございました。

合掌

（福田元二）

飼育うらばなし

◆ベニガオザルの親子結合作戦

今、ベニガオザルのおりの中では、まっ白な毛をした赤ちゃんが、お母さんに抱かれてお乳を吸っているのが見られます。

実はこの赤ちゃん、生まれてすぐにお母さんのお乳をもらえたわけじゃないのです。

彼（赤ちゃんは男の子です）が生まれる前、お母さんは動物病院に入院していました。

産道（赤ちゃんが生まれてくるところ）の病気のためでした。このままではお腹の赤ちゃんが外へ出て来れずに死んでしまう、ということで2月のある寒い日「帝王切開手術」が行われました。これはお母さんを麻酔して、眠っている間にお腹を開き赤ちゃんを取り出す手術なの

です。

手術の後、お母さんが元気を回復するまで、生まれてきた赤ちゃんは飼育係のおじさんが人工哺育することになりました。お母さんの代わりに朝から真夜中まで哺乳ビンを使ってお乳をあげたのです。

そして4日目、お母さんもずい分元気になったので赤ちゃんを返すことにしました。

ところがこのお母さん、赤ちゃんが生まれて来た時のことを知らないのです。自分の子供だと認めなかったのです。泣いている赤ちゃんに背を向けて、ちっとも抱いてくれようとしません。

無理矢理赤ちゃんをしがみつかせました。

でも体をゆすって振り落すのです。

何度も、何度もこんなことを繰り返し、およそ1時間が経ちました。

「あーあ、やっぱり自然出産でないとかんのかなあ」と私達があきらめかけた時、お母さんの腕がすっと赤ちゃんの腰にまわったのです。

それ以来、このお母さんはしっかりと赤ちゃんを抱くようになり、私達がのぞくと歯をむいて怒るほどになりました。

本当に自分の子供だと思っているのかどうか今でも私達にはわかりませんが、赤ちゃんはおいしそうにお母さんのお乳を吸っています。

そして、4月には親子そろって動物病院を退院して群へ戻りました。仲間たちは約2カ月間留守をしていた彼女を、初めは珍らしそうに眺めていましたが、いじめることもなく、迎え入れ、今では総勢9頭の平和なサル社会になっています。

（村田浩一）



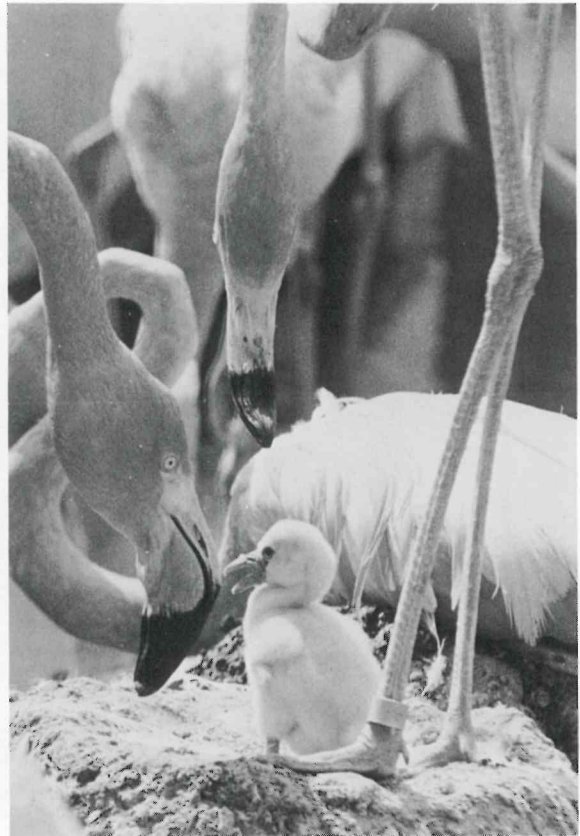
母親の元へ戻った赤ちゃん

◆フラミンゴに待望のひな誕生

入園者の皆様を最初に迎えるフラミンゴに、当園では初めて自然ふ化（親が抱いてひなをかえすこと）によるひなが誕生しました。当園には以前から4種類 100羽余りのフラミンゴを飼育しているのが自慢でしたが、今までひなが生れませんでした。わずかに、ヨーロッパ・フラミンゴが1羽人工でふ化・育すう（ふ卵器を使って人の手でひなをかえし育てること）しただけで、フーちゃんと名付けられ今も元気で暮しています。

このため、もっと多くのひなをかえそうといろいろと考えた末、昨年春にフラミンゴ池の改造工事を行いました。今までは野犬におそわれるため、夜は狭いケージに追い込み、又、フラミンゴが飛んで逃げないように風切り羽根を切っていましたが、柵を高くしたり、飛ばないように障害物を置いて、昼も夜も同じ場所で飼育し、羽切りもやめました。そして、奥地に小さなプールも作り、巣が作りやすいようにするなど環境作りの工事を行いました。

まもなく、私達が考えた奥地の静かなプールには見向きもせず、入園者の目の前にある島に上がり植木を引きちぎって巣作りを始めました。どうやら、フラミンゴ達はこの島が気に入った様子でした。この年は残念ながら卵を生みませんでした。そこで、今年は早くからこの島に土を入れ、固くならないように耕したり水を撒くなど巣を作りやすくしてやりました。そして、3月下旬には一番乗りのフラミンゴがこの島で巣作りを始め、4月下旬には多くのフラミンゴがこの狭い島に上がり、にぎやかに鳴きながら巣の場所の取合い合戦、中には長い首を伸ばしてくちばしでつつき合いのけんかもします。やがて、場所が決まると足元の土をくちばしでかき寄せ足で踏み固めながら盛り上げ、直径35cmぐらいの植木鉢を伏せたような巣を作ります。せっかく作った巣もちょっと留守している間に別のカップルに横取りされ大げんかすることも



両親に守られて成長するひな

度々ありました。こうして、強いカップルから順番に良い場所に巣を作り、その数は15個、そして、次々と卵を生み抱き始めました。私達は想像以上の産卵ラッシュでうれしい悲鳴です。

ところが、心配なのは、ひながかえった時にカラスにおそわれることです。動物園には朝夕に多くのカラスが来て幼いひなをおそいます。昨年白鳥のひながカラスに殺されました。ひなが小さい時は親が羽の下で隠して守りますが、少し大きくなって、チョロチョロ歩きだすと危険です。そこで、早速、飼育の人が全員で広いフラミンゴ池全体をネットでおおいました。こうして、最初のひなが6月8日にかえり、今までに3羽が誕生し元気に育っています。来年は島をふやして今年以上のベビーラッシュにしたいと思っています。

(吉竹 渡)

今年もベビー・ラッシュ



▼カリフォルニア・アシカ ▲ブラザグエノン(ブラザモンキー)



(撮影・福田元二)

かわいい動物のこどもたち



ヒマラヤ・グマ▲

フラミンゴ



シロカケイ▼



動物育児日記

◆ヒマラヤグマの子ども



お田さんと遊ぶ子グマ

昨年12月17日の朝、ヒマラヤグマの赤ちゃんが生まれました。王子動物園にとってはクマ類が誕生したのは16年振りのことです。お母さんグマの体重は150kgもありますが、生れた子グマはわずか250gと小さく、まるでネズミのようで、とてもクマには見えません。また、立つことも歩くこともできず、もち論、目も見えませんが、20日間ぐらひは暖かいお母さんグマの胸に抱かれ、「クック・クック・クー」と声を張り上げながら乳を飲む毎日が続きます。(赤ちゃんグマは母親に抱かれ見えない時がほとんどですが、この鳴き声で元気に育っていることが判ります。)1カ月もたつと、ヨチヨチながらはうようにして歩き始め、だんだんと足や腰が強くなり、しっかりしてきます。柔らかく短い体の毛も1cmぐらい伸び黒くなって、クマらしい体つきになります。生れて45日目にやっと目が開きました。

でも、パッチリとクマらしい目になるのは、さらに数日かかります。目が見えるようになると動く範囲も広くなり、寢室を歩き回り、3カ月もすると金網をよじ登ったりしていたずらを始めます。そのころには体重は6kg、体長38cmにも成長し、歯も生え始め、母乳だけでなく、みかんやりんごをペロペロなめるようになりますが、固い食物はまだ食べません。

もう、このころになると、子グマは遊び盛り、お母さんグマのお腹に乗ったり、相撲をとったり、タイヤにぶら下ったりして楽しい毎日が続き

ます。しかし、お母さんグマは子グマの遊び相手になるだけでなく、強く、たくましいクマになるように教育することを忘れません。いたずらが過ぎると、直経10cmもある大きな前足でビンタを加えます。

生れて6カ月になる今では、こわかったプールの中へもよく入ってよく遊び、大好物の牛乳やパン、サツマイモなどお母さんグマと取り合いしながらどんどん成長しています。ただ、毎日お母さんグマと一緒に居ますが、クマの習性として、お父さんグマは子グマの面倒を見ず、逆にいじめることがあるので、お父さんグマと一緒に生活できないのが残念です。

(岸田一也)

◆フクロテナガザルの人工ほ育

2月のある日、生れたばかりのフクロテナガザルの赤ちゃんが、床の上で弱々しく泣いていました。体もずいぶん冷たくなっています。

いったい、お母さんはどうしたのでしょうか。

子供の育て方を知らないのだろうか。若すぎるからなのだろうか。いろいろと考えてしまいます。

でも、ともかくすぐに冷えきったこの赤ちゃんを暖めなければなりません。元気になるまで私の体で暖めてやることにしました。1時間ほどたってから、かわいい目を開き、やっと、甘いお湯を飲んでくれるようになりました。

さあ、これからが大変です。1日中赤ちゃんを抱いてお乳をやっているあのお母さんの代わりに私がしなければならぬのです。人間用の粉ミルクをほ乳びんで2時間ごとに与えるため、毎日家へ車で連れて帰るのです。夜中の2時、夜明けの5時ごろには

「お腹がすいたよ。1人で淋しいよ」

と大声で鳴くのですから、ゆっくりと寝ている暇もありません。

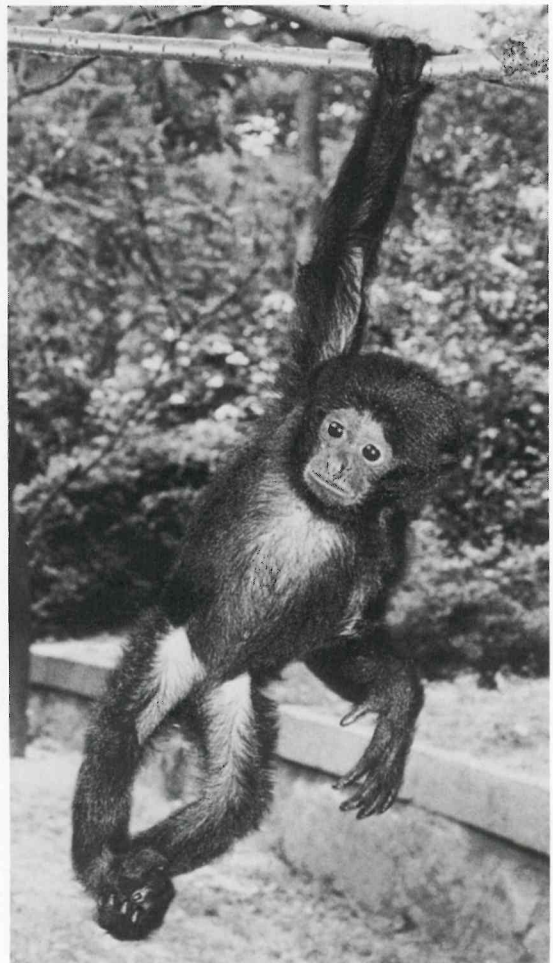
このようにして1カ月半が過ぎました。人間と違って成長が早く、もう歯が数本生えました。少しかわいそうでしたが、このころから夜は動物病院の保育器の中で1人で寝てもらうことにしました。さびしがり屋なので心配でしたが、慣れてくれたようです。

そして、生れてから4カ月、もうお乳だけではなく、パンやりんごも食べられるようになり

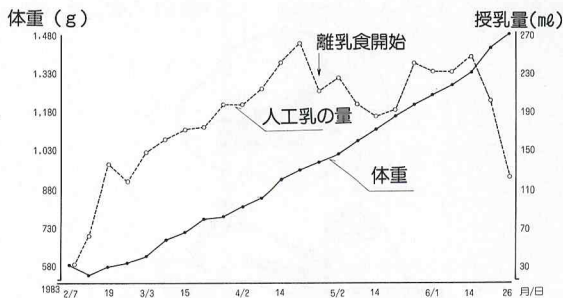
ました。テナガザル特有の長い手を伸べて棒につかまりブランコをしたり、こたつのコードを引っ張っていたずらな遊びも最近ではしています。でも、さびしがり屋の性格は変わりなく、私達の姿を見つけると口をとがらせて呼びます。

これからはどんどん大きくなっていくでしょう。でも問題はまだまだあります。その一つは、本当の仲間のところへ戻すことです。人間に育てられた野生動物は、自分を人間の仲間と錯覚するでしょう。簡単には本当の仲間のところへ戻ってくれないのです。私の心配は、この子供が大きくなって他のテナガザルの仲間と元よく遊び回ってくれるまで続くことでしょう。

(松尾嘉則)



ぶら下がることもできるよ



体重と人工乳のグラフ

— 動物 なぜ なぜ 問答 —

◎背の高いキリンやシマウマのような眠り方をするのでしょか。

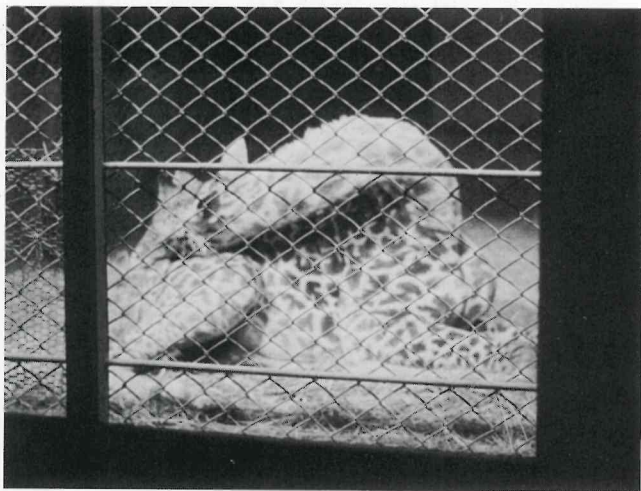
よく学生たちから質問をうけます。いや、飼育係の私たちこそ、動物たちの夜の姿を知っておく必要があるのです。何度も深夜にそっとしのびよっても、足音や気配を感じて、さっと起きてしまいなかなか寝姿を見ることができません。それでも長年の間に色々な寝姿を知ることができました。

ゴリラ・チンパンジー・オランウータンはみな人間と同じで仰向きに眠っています。水の中にいるアシカもカバも夜には陸にあがり、みんな体をよせあっています。

夜行性のキツネ・タヌキはどうかと思えばエサを食べたあとぐっすり眠っているのにはちょっと意外です。

さて、背の高いキリンやシマウマはどうでしょう。午後11時をすぎ、深夜になると長い足をゆっくり折り敷わらの上に座りました。まだ長い首はのばして辺りに注意しています。そのうち、くると首を曲げ丸くなって眠りました。ウマは立って眠るなどといわれますが、シマウマもトカラウマもロバも、みな座っています。いやあの巨体のゾウもメスは横になっているのです。大きな鼻イキをだすのはゾウだけかと思えばサイの大きなイビキにはおどろきました。イヌと同じ座り方で眠るオスもメスもヒュー、ヒュー、ヒュー。イビキにまじってあっ！オナラも、もらしていました。

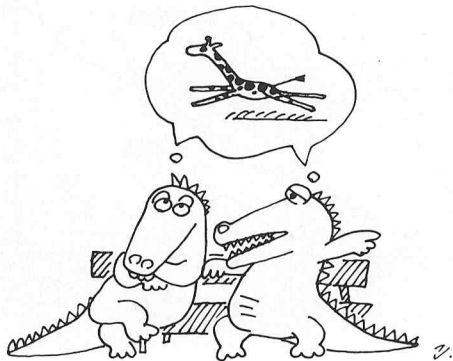
(亀井一成)



◆「ワニ、何で動かへんの？」

小学生A「あっ、ワニやワニや！」 小学生B「ほんまや。そやけど動かへんで、生きとんか？」 小学生C「生きとうわ。お腹見てみいな、あれ呼吸しとうねんで」 小学生A「そしたら何で動かへんねん。こら、生きとんのやったら歩いてみい！」 小学生C「やめとき。ガラスたいたたらあかんゆうて書いとうやん」 小学生B「動かへんの、おもしろいわ。あっち行こうや」 小学生A「そや、行こ行こ」 ワニA「……………かなわんなあ」 ワニB「ほんまに」 ワニA「わしら、^{ほか}他の動物と違ってずっと動いてるタイプやないもんなあ」 ワニB「そや。待ち伏せして、^{えい}獲物が来たらその時だけ思い切りがんばるんや。それに一回食べたら、だいぶもつもんなあ」 ワニA「そやし、この体見て欲しいわ。キリンやシマウマとちゃうもんあ」 ワニB「あいつらは、いつも食べて歩き回るタイプやからね。けど、2本足で走り回とうあの子ら、数億年も前には人間の祖先はわしらの仲間やいうこと知るとんのやろか」 ワニA「うん……………。ゆっくり立ちどまって考えて欲しいことやね」

(村田浩一)



動物もの知り手帳

～なんでも知っちゃお!～

◆つの(角)のお話し <その2>

前号では毎年はえ変わる鹿の角のお話しをしました。今回は角を持っている他の動物達のことをお話ししましょう。

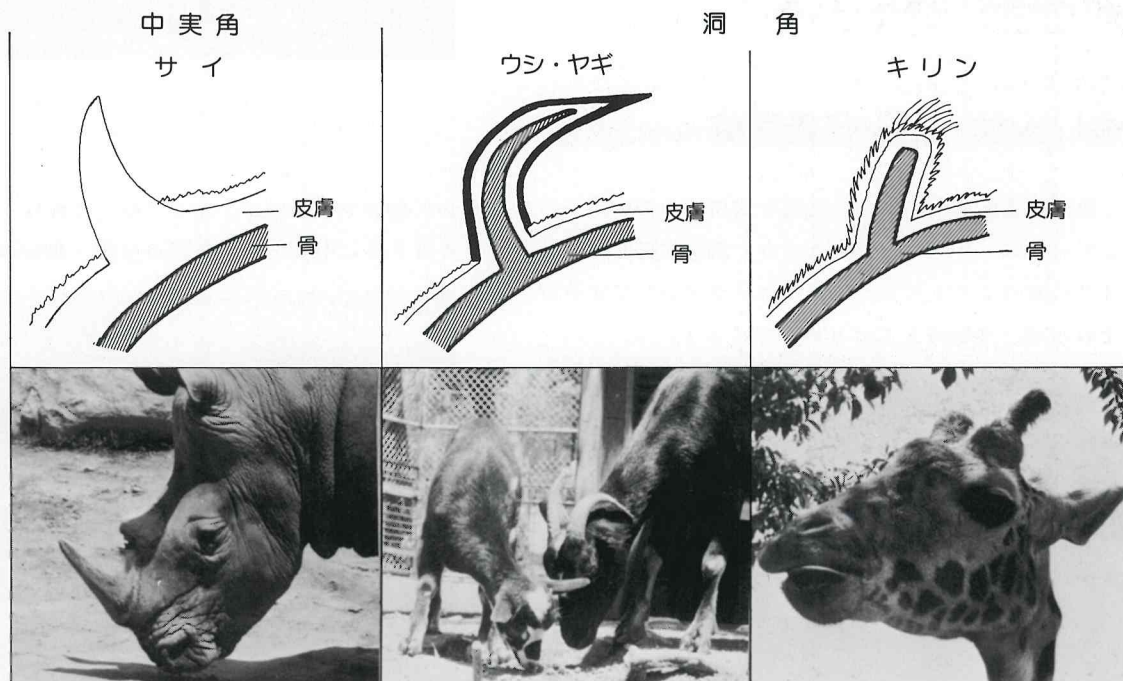
ウシやヤギの仲間は雌も雄も角があります。この角は鹿のように枝分かれせず、一生はえ変わらないで少しづつ伸びていきます。この秘密は頭骨から骨が突き出たもの、これを角心かくしんといますが、これを皮膚の角質化した角鞘かくさかというものでおおわれています。このような角を洞角どうかくといい、一度切り取ってしまうと再び元どりの形にはえて来ないのです。

皆んなの大好きなキリンには角があるのでしょうか？キリンもウシと同じように角の中心は骨ですが、皮膚の角質化した角らしい角でなく、皮膚でおおわれていて、先に少し長い毛がはえています。キリンにはこの2本の角のほかにもう1本の角があります。これは額ひたいの中ほどに山型にふくらんだものなのですが、角のようにはみえませんがこれもやはり角なのです。

サイの角は何本あるのでしょうか。頭の上には無く、額の中央に一本、又は鼻先きとその少し上に並んで2本の角があります。ジャワサイ以外は雌も雄も角を持っています。この角はキリンやウシとちがって中心部には骨がありません。皮膚が非常に確く角質化したもので、この角のことを中実角ちゅうじつかくといいます。この角はほっておくとどんだんのびますので岩にこすり付けて表面をけずり長さを一定に保つようにしています。王子動物園のシロサイも短かくて正三角形のようにみえるときや、ずいぶん長くて槍やりのようになっていて、この角で突かれたら恐ろしいなと思うぐらいのびているときもあります。

最近の研究で角をみて年齢がわかるようになった動物もあります。森林植物園でご覧になった人もあると思いますが、日本カモシカの角には年輪があり、この数をかぞえると年齢がすぐわかるので野生の日本カモシカの調査研究に大変役立っているのです。

(権藤真禎)



トピックス (58年2月～58年6月)

◆天津から友好動物到着

神戸市の友好都市である中国・天津市からレッサーパンダ、茶色火鶏、青火鶏のそれぞれペアが、2月22日、天津市動物護送団（張喚亭団長、陳国斌・天津動物園長ら5名）によって無事到着、2月26日火鶏舎前で贈呈式が行われました。



◆「こうべの動植物園」展開催

3月24日から29日まで6日間、神戸三宮「さんちか広場」で市内の5園館（王子動物園・須磨水族館・須磨離宮公園・森林植物園・六甲山牧場）が共同して「自然・ともだち・5つのふれあい」をキャッチフレーズに催しを行い、連日多くの入場者でにぎわいました。



◆レッサーパンダ舎完成

北園の北極熊舎の南側の広場を利用して待望のレッサーパンダ舎ができあがり、今まで転々と仮住いしていたレッサーパンダもようやく新居に落ちつききました。4月7日に中澤・土木局長や福岡・動物園長と入園のこどもたちと共にテープカットしてオープンし、それ以来、多勢の人でにぎわっています。

このレッサーパンダ舎は運動場が75㎡、放養式で見やすく竹林や樹木で森の感じを出しています。また、30㎡の建物には、ステンレス製の寢室で、しかも、冷房付きで暑さに弱いレッサーパンダもこれで安心、竹の保冷庫も付いています。



◆「旧ハンター邸」春の内部公開

園内にある国指定重要文化財「旧ハンター邸」の内部公開を4月1日から1カ月間行いました。今回は邸内壁面を利用してかわいい動物の写真を展示し、邸内を訪れる人たちの人気を得ました。

◆シロサイの体重を計る会開く

計量記念日にちなみ、恒例の動物を計る会が当園と神戸市計量検査所の共催で6月5日に行われました。今年は、シロサイ夫妻で、今回も2頭合計の体重を当てるクイズがありました。計量の結果、オスの「サブロウ」は2,060kg、メスの「ナナコ」は2,010kg、合計で4,070kgで2,300人の応募者がありましたが正解者はなく4,063kgが最も近い数字でした。



◆「人工くちばし」のコウノトリ元気で退院

2年半ほど前に負傷して上のくちばしを失ったため合成樹脂で作った人工のくちばしを付けたコウノトリの話は本紙12号に載りましたが、その後、何回となく外れ、その都度改良して付けてきましたが、昨年6月に8回目の装着をして以来、外れず、生活に支障がないので、4月に退院し、6月には一度別れたメスも帰り、ケージ内を元気で飛び回っています。



◆人事住来

3月31日付で前園長・山神正氏が退職され、4月1日付で福岡順三氏が園長に就任、また、飼育係長橋本昭一氏は主幹に昇任しました。なお、山神正氏は6月1日付で王子動物園協会常務理事に就任されました。(谷岡正之)

◆野生生物保護基金にご協力ください

動物園の中に大きなパンダの募金箱があるのをご存知でしょうか。これは、スイスに本部があるWWF（世界野生生物基金）がイギリス・アメリカ・日本など26カ国の加盟を得て、滅びゆく野生動物を救う運動を行っています。それには多額の基金が要ります。そのため募金で日本委員会（WWF J）は全国の動物園や水族館にパンダの募金箱を置いて基金を集め、三分の二はスイスの本部に送り、世界の自然や動物保護に役立ててもらおうと共に、残りの三分の一を日本のトキやイリオモテヤマネコなど動物保護のため使われています。王子動物園には正面入口と食堂2カ所にパンダの募金箱があります。皆様のご協力をお願いします。



版画で見る王子動物園（その1）



国画会・日本版画協会会員で神戸出身の著名な版画家・川西祐三郎先生をお願いして、王子動物園を版画で描いて頂きました。近日中に、園売店で5枚セットにして販売する予定です。

編集後記

はばたき14号をお届けします。この半年間、王子動物園ではいろいろな出来事がありました。ザークの死、天津からの友好動物、コウノトリの人工くちばし、ベビーラッシュ……。とてもこの一冊に書ききれないぐらいあり、仕方なく次号に回わしたのものもあります。編集スタッフ一同、次号へ向けて張り切っています。（編集室）

はばたき 第14号

昭和58年7月20日 発行

編集：神戸市立王子動物園

発行：神戸王子動物園協会

神戸市灘区王子町3丁目1

印刷：梶原出版印刷合資会社

1部 100円

83071500